



## 映画雑感 10

柴生田 晴四  
(経済倶楽部理事長)

▼19年下半期の邦画から。まず「風待ち」。  
元SMAPの香取慎吾が刑務所帰りの競輪依存症のダメ男に扮します。印刷屋で働き恋人もできませんが、同僚から無理矢理誘われ、再びヤミ競輪にのめりこみます。賭博から抜け出せず、暴力行為に走りながらも、どこかに一途なものを秘めている主人公を香取が見事に造形し、新境地を開きました。

▼「ファイナルファンタジーXIV 光のお父さん」

秋に公開された「i新聞記者ドキュメント」はその望月記者に密着した意欲作で、日本のジャーナリズムの現実とその抱える問題点が浮き彫りにされました。

▼「天気の子」は、「君の名は。」の新海誠監督の新作。家出して上京し、怪しげなオカルト雑誌でライターとして働く少年が、雨の降り続く都会の片隅で天気を晴れに変える不思議な少女に出会います。危険を顧みずに前を向いて生きようとする彼らは、調和の崩れた現代社会になすすべもない大人たちへの強烈な批判が隠されています。

▼秀作「淵に立つ」の深田晃司監督と主演筒井真理子のコンビによる「よこがお」は、不条理な現実によって平穏な生活が崩壊に追い

は、ブログ日記から書籍化され、TVドラマ化もされた同名小説の劇場版映画。ゲーム好きの青年は幼いころの行き違いから会話できない父親が突然会社を辞めてTVゲームに没頭するようになったことから、オンラインゲームの中で仲間とともに父親を『光の戦士』に鍛え上げることを計画します。ゲームの世界とリアルの世界とを行き来しながら親子が心を通わせるまでを描きます。ゲームの高揚感がドラマ展開に見事に溶け込んでいます。

▼「新聞記者」の原作者である望月衣塑子さんには10月に講師としておいでいただきました。政治権力が自らの利益のために都合の悪い真実を隠蔽する巧妙かつ卑劣な仕組みが、ほとんど事実であると聞くと愕然とします。

込まれる女性の姿を通じて現代社会の閉塞感を鋭く映像化しています。

▼新井浩文が出演していたために公開がのびのびになっていた「台風家族」をやっと見ることができました。市井昌秀監督の新作は、家族の葛藤をリアルに描いた辛口のブラックコメディでした。両親が銀行から強奪した2000万円とともに行方不明になってから10年が経ち、子供たちの家族が昔の家に集まってきました。失踪宣告が成立して遺産を分配しようとする長男が集合をかけたのですが、いずれも自分の都合を主張して話はまとまりません。それぞれの事情が次第に明らかになり、やがて思いもよらない方向へ走り出します。強欲で自分勝手な長男を草薨剛が怪演。